**聖霊降臨節第13主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年8月11日**

**「聖書はキリストを証しする」**

**イザヤ書53章7～8節**

**53:7 苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。**

 **53:8 捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。**

**使徒言行録17章10～15節**

 **17:10 兄弟たちは、直ちに夜のうちにパウロとシラスをベレアへ送り出した。二人はそこへ到着すると、ユダヤ人の会堂に入った。**

 **17:11 ここのユダヤ人たちは、テサロニケのユダヤ人よりも素直で、非常に熱心に御言葉を受け入れ、そのとおりかどうか、毎日、聖書を調べていた。**

 **17:12 そこで、そのうちの多くの人が信じ、ギリシア人の上流婦人や男たちも少なからず信仰に入った。**

 **17:13 ところが、テサロニケのユダヤ人たちは、ベレアでもパウロによって神の言葉が宣べ伝えられていることを知ると、そこへも押しかけて来て、群衆を扇動し騒がせた。**

 **17:14 それで、兄弟たちは直ちにパウロを送り出して、海岸の地方へ行かせたが、シラスとテモテはベレアに残った。**

 **17:15 パウロに付き添った人々は、彼をアテネまで連れて行った。そしてできるだけ早く来るようにという、シラスとテモテに対するパウロの指示を受けて帰って行った。**

1.

 **聖書を一日一章読むと旧約聖書は約3年で、新約聖書は約1年で読むことができます。皆さんも朝あるいは夜寝る前または折に触れて心を静めて聖書を読み、日々祈っておられると思います。一日に一章ずつ読む方、数章まとめて読む方、あるいはもっとじっくりと読む方など人によって読み方は様々だと思います。**

**ただ、やはり聖書は難しいところがたくさんありまして、一人で読んでいてもなかなか理解できないところがあるのも事実です。わからなくてもひたすらに読み続けるというのも一つの方法ですし、何か手引書のようなものを参考にして聖書を読んで理解するのも方法です。「信徒の友」の「日毎の糧」を手引きにしている方もおられるのではないかと思います。「日毎の糧」に記されているのは本当に短い解き明かしですが、この解き明かしによって慰められて励まされて日々歩んでいる方もおられるでしょう。**

**私は試行錯誤で聖書の読み方も色々変わってきましたが、今は一日に旧約聖書と新約聖書を各1章ずつ読んでいます。そしてやはり読み進める中で手引きとなるものが欲しいなと思いまして「信徒の友」の「日毎の糧」の聖書箇所をプラスして読みその箇所の解き明かしを読んでいます。自分一人だけで読んでいたのでは気づかない大事なところが丁寧に解き明かされたりして「ああ、そういうことだったのか」と思わせられる恵みや多くの慰めをいただいて感謝して読み祈っています。**

**本日私たちに与えられています聖書箇所を読み進めていくうちに私はある聖書箇所が頭に浮かびました。それは同じ使徒言行録でフィリポがエチオピアの宦官に聖書の手引きをしたという箇所です。使徒言行録8：26以下です（228頁）。**

**エチオピアの宦官がエルサレムで神様を礼拝して帰る途中のことです。宦官は聖書のイザヤ書を朗読していました。それが今日の旧約聖書イザヤ書53：7～8です。**

**「53:7 苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。**

 **53:8 捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。」**

**宦官は預言者イザヤが誰のことを言っているのかわかりませんでした。「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」（31節）と言っています。聖霊に導かれた**

**フィリポは聖書のこの箇所から説きおこしてイエス様についての福音を告げ知らせたので**

**す。つまり預言者イザヤはイエス・キリストが私たちの罪のために苦しまなければならない**

**こと。十字架への道を歩まなければならないことを語っていると。さらには福音ですからイ**

**エス様の十字架の死によって私たちの罪が赦されて私たちは救われていること。イエス様**

**は十字架の死から甦り復活して私たちに永遠の命を約束して下さっていること、「その福音**

**はあなたに与えられた福音ですよ」と語ったのでした**

**すると、フィリポの語る福音を聞いた宦官はイエス様こそが聖書が証している救い主であり、イエス様の十字架の死も復活のこの私のためであることを信じて受け入れて洗礼を受けたのです。**

**8：39にはこのように記されています。**

**「彼らが水の中から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った。宦官はもはやフィリポの姿を見なかったが、喜びにあふれて旅を続けた。」**

**喜びにあふれて旅を続けたのです。イエス様の十字架と復活によって救われた恵みを大きな喜びを持って信仰の旅路を歩んだのです。そしてエチオピアに帰って伝道をしたとも言われています。**

**宦官は熱心に御言葉を求めました。聖書を熱心に読んでも「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と言っていた宦官がフィリポの手引きによって、これはイエス様のことを語っているんだ、聖書はキリストを証しているんだ、さらにはこれは私のための出来事なのだと気づかされて信仰へと導かれ喜びにあふれた宦官の姿が、今日私たちに与えられた使徒言行録の個所のべレアのユダヤ人たちの姿と似ているなと思いました。**

**テサロニケから約80キロ南西にあるべレアという町にパウロたちは送り出されました。パウロたちはここでも決して臆することなくユダヤ人の会堂に入って聖書を引用して語ったのです。このべレアで語ったことはおそらくテサロニケで語ったことと同じでしょう。**

**「メシアは必ず苦しみを受け、死者の中から復活することになっていた」と、また、「このメシアはわたしが伝えているイエスである」と説明し、論証した（17：3）。主に委ねて解き明かしたのです。するとべレアのユダヤ人たちは11節にありますように、「テサロニケのユダヤ人たちよりも素直で、非常に熱心に御言葉を受け入れ、そのとおりかどうか、毎日、聖書を調べていた。」のです。**

**私たちはここを読むと、べレアの人たちは会堂でパウロの説教を聞いてパウロが語っていることが聖書に書いている本当の事かどうかを各自が家に帰って毎日熱心に聖書を読んで調べて「ああ本当にそうだ」と気づかされる、そんな姿を思い浮かべると思います。この当時は聖書は（それは私たちが言う旧約聖書しかありません）各家にあるわけではありません。ましてや今のように一人に1冊あっていつでも気軽に読めるという時代ではありません。聖書は巻物であって会堂に行かないと読むことができないというのが基本でした。**

**ですから、べレアの人たちはパウロの説教を会堂で聞いて、非常に熱心に御言葉を受け入れて、非常に熱心な思いを持って皆で毎日会堂に集まって聖書がパウロが言うようにイエス様の福音が書かれているかどうかを調べたのです。もしかしたら創世記から預言書まで聖書の隅々まで読み調べたかもしれません。この「調べる」という言葉には「尋ねる」とか「問いただす」という意味があります。ですから読んでいてわからないことは尋ねて問いただしたのでしょう。誰に尋ねて問いただしたかというと、恐らくパウロも毎日会堂に行ったのでしょう。御言葉を求めるのに非常に熱心なべレアの人たちのために毎日会堂に通って、べレアの人たちが尋ねることに答えて、問いただすことに答えていたのでしょう。それはちょうど「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と尋ねたエチオピアの宦官に丁寧に聖書を解き明かしてイエス・キリストの福音を宣べ伝えたフィリポのようであります。**

**ベレアの人たちは熱心に、熱い心で、霊に飢え渇き、魂に飢え乾く、心の底から御言葉を**

**求めて御言葉を受け入れるのです。毎日毎日会堂に通ってパウロの手引きのもとで聖書を読み進めていくのです。パウロも熱心に丁寧に何よりも聖霊に満たされると共に、聖霊が聞くベレアの人たちに働いて下さることを信じて聖書を読み御言葉を解き明かすのです。聖書はイエス・キリストを証している。イエス様の十字架も復活も聖書に記されている神様の大きな恵みである。その恵みはあなたたちにも与えられている大きな恵みである。**

**するとそこに神様が働いて下さったのです。フィリポの解き明かしを聞いた宦官のように、聖書を通してイエス様と出会ったベレアの人たちの多くが信じて信仰が与えられました。さらには、ギリシア人の上流婦人や男たちも少なからず信仰に入ったと記されています。こうしてベレアの町にキリスト教会が誕生したのです。**

**ただ、テサロニケにおいて妬みに燃えたユダヤ人たちは80キロも離れたベレアで神の言葉が語られていることを聞きつけて、わざわざ押しかけてきて群衆を扇動して迫害をするのです。それでベレアのキリスト者たち、生まれたばかりのキリスト教会の兄弟姉妹はパウロを助けるという行為に出るのです。下手をすればテサロニケのユダヤ人たちに手荒な真似をされるかもしれないのに、自分の身の危険も顧みずにパウロを助けるといういわば愛の業に励んだのです。感謝と喜びを持って主に仕えるキリスト者の姿です。その姿は洗礼を受けてキリスト者となり喜びに満たされてエチオピアに帰り福音を宣べ伝えた宦官のようです。**

**聖書をもう少し読み進めていきますと、20章4節に「ピロの子でベレア出身のソパトロ」という人のことが記されています。そのベレア出身のソパトロはパウロの第3次伝道旅行に同行した人です。パウロが今日の個所で福音を宣べ伝えたベレアでイエス様と出会い信仰に導かれて、ベレアの教会のキリスト者となったソパトロです。このソパトロが救われた大きな喜びを持って主に仕え教会に仕えて隣人に仕えて伝道に励む、その名前から私たちは神様の大きな御業を思わずにはいられないのです。**

**「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」エチオピアの宦官がフィリポの手引きによって聖書はイエス・キリストを証しするものであるとわかり信仰に導かれました。ベレアの人たちはパウロの手引きによって聖書がイエス・キリストを証しするものであるとわかり信仰に導かれました。そして大きな喜びを持って主に仕え教会に仕えて隣人に仕えてイエス様の福音を宣べ伝えて愛の業に励みました。**

**私たちも聖書を読みます。熱心に御言葉を求めて読む私たちの「手引きしてくれる人」それはイエス様だと思います。手引きの文字通り私たちの手を引いて下さるのはイエス様です。どこへ手を引いて下さるかというと教会であると思います。イエス様は私たちを教会へと招いて下さっているのです。教会の礼拝で信仰の兄弟姉妹と共に聖書を読み、牧師が語る御言葉の解き明かしを聞くのです。その解き明かしを通してイエス様ご自身が証しをして下さるのです。旧新約聖書を通してイエス様ご自身が十字架と復活の愛を証しをして下さるのです。**

**「ああ聖書は本当にイエス様のことが証しをされているものなんだ。イエス様の十字架と復活の出来事は遠い昔の出来事ではなくて、今この私の罪の贖いのために、私を罪から救い出すためにイエス様は十字架にかかってくださった。イエス様はこんな私を愛して下さっているんだ。そして永遠の命の希望が与えられているんだ」その計り知れない大きな恵みを心の奥底から理解ができるようになるのです。その計り知れない大きな恵みがあるからこそ私たちはこの恵みを自分一人だけのものにするのではなくて、一人でも多くの人に伝えられるようになるのです。感謝と喜びを持って主に仕え教会に仕えてまた隣人に仕えて愛の業に励むことができるのです。**